

昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜 —それに同調しなかった人々—

宮澤 正典

要旨

昭和戦時下のひとつの転換点は 1937 年の日独伊防共協定、40 年の三国軍事同盟であった。各新聞はそれに先立ってヒトラー総統に対して厳しく批判してきた。しかし、1935 年にまず『朝日新聞』がヒトラー讃美に転じ、他紙も競って三国同盟を「人類の福祉に貢献すべき世界史の新時代」とうたい、ドイツのユダヤ人弾圧にも共鳴化した。それを批判する自由主義者たちの一人清沢冽はナチスの運動は論理の解剖にたえない宗教運動であり、ヒトラーの一人芝居になっており、恐ろしく独断的、狭量であることを批判している。ユダヤ避難民の満州入国に尽力した樋口季一郎中将、ユダヤ避難民に外務省の意向をこえて日本通過ビザを発給した外交官杉原千畝などがいた。そのビザで敦賀に到来したユダヤ人に対する市民と新聞報道との落差についても考察した。

キーワード

昭和戦時下、新聞、親ナチ、反ユダヤ、自由主義者

はじめに

日本には欧米諸国におけるようにユダヤ人が少数民族として共存し、公私の生活レベルで関わりをもっていた場合に対応するようなユダヤ人問題は存在しなかった。1933年以降のナチス・ドイツにおけるユダヤ人迫害激化、ユダヤ避難民がひろがるなかヨーロッパ、中国、満州などの在外公館からユダヤ人問題について、あるいは反ユダヤ的な対応策提案などが外務省に寄せられてきていたが、1935年段階でも差し迫った問題意識はなかったのではないだろうか¹。

「国際連盟独逸避難民ニ関スル高級委員会事務総長」からの「身元及旅行証明書ノ必要ノ場合ニ於ケル発給方其ノ他ニ関スル」勧告に対する外務大臣から在外公館長宛訓令「独逸避難民ニ関スル件」（3月12日付）からもうかがえる。「我国ニ於テハ独逸避難民ノ滞在セルモノ殆ンド無之状態ナルノミナラズ本件ハ政治的ノ関係有之右勧告ニ対スル我国ノ態度及回答振ニ関シテハ今猶考慮中ナルモ一方今後ニ於テハ各国ノ発給シタル比ノ種身元及旅行証明書ヲ所持セル独逸避難民ノ我国ニ渡来セントスル場合モ可有之ニ付比ノ際実際問題トシテ之ガ取扱方ニ関スル我国関係官庁ノ方針ヲ取纏メ置クノ必要有之」内務省、拓務省と協議した結果、基本的にはかつてのロシア避難民、アルメニア避難民の例もあり「独逸ノ国籍ヲ有スル避難民ニ対シテハ我国内法上之ヲ一般ノ独逸国民トシテ取扱フノ外ナキトニ意見ノ一致ヲ見」、本年5月1日より然るべく取扱うべしとしていた²。

その後、1938年3月シベリアからソ連領オトポールに到着したユダヤ避難民をめぐる満州国外交部の入国拒否、ハルビン特務機関長樋口季一郎による入国実現のための奔走については後述する。この年の12月五相会議（首相、蔵相、外相、陸相、海相）において「猶太人対策要綱」が決定される³。

独伊両国トノ親善関係ヲ緊密ニ保持スルハ現下ニ於ケル帝国外交ノ枢軸タルヲ以テ盟邦ノ排斥スル猶太人ヲ積極的ニ帝国ニ抱擁スルハ原則トシテ避クヘキモ之ヲ独国ト同様極端ニ排斥スルカ如キ態度ニ出ツルハ啻ニ帝国ノ多年主張シ来レル人種ノ平等精神ニ合致セサルノミナラス現ニ帝国ノ直面セル非常時局ニ於テ戦争ノ遂行特ニ経済建設上外資ヲ導入スルノ必要ト対米関係ヲ悪化スルコトヲ避クヘキ観点ヨリ不利ナル結果ヲ招来スルノ虞大ナルニ鑑ミ左ノ方針ニ基キ之ヲ取扱フモノトス

そして、いささかの打算にたつ三方針の第一は「現在日、満、支ニ居住スル猶太人ニ対シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ特別ニ排斥スルカ如キ処置ニ出ツルコトナシ」というものであった⁴。ヒトラー登場によるユダヤ人弾圧、ユダヤ避難民が世界的問題となった段階でも日本国の対応策は以上のような状況であった。

では新聞はどうだったのか。それまで日本の新聞がユダヤ人問題を積極的に取りあげることはなかった。じつはナチス党政権の動向がらみに展開したと言ってよい。

1933年1月31日『大阪朝日』はその前日のヒトラー内閣成立を報じ、解説的記事でユダヤ人問題に言及して「ユダヤ人絶滅は国粋社会党の代表的スローガンで1932年7月国粋社会党からユダヤ所有の土地没収法案をプロシヤ議会に提出した事がある、ヒトラー氏の政権把握がユダヤ人間に非常な恐怖をまき起こすことは間違ひない」とだけ述べているに過ぎない。翌2月1日の「天声人語」はいかなる政党でも政権にありつくと在野時代の声明を空手形で支払いたがるとして、ユダヤ人圧迫についても「彼らの智恵と金権とが、さやうにたやすく排斥しうるか」、「出来かねる」と軽く扱っている。ところが3月5日の総選挙後の露骨なユダヤ人迫害を報じることになる。3月11日にはそれが「全国に蔓延する模様であり成行きは憂慮されてゐる」（ベルリン特電10日発）と報じているが、4月に入ると相次いでユダヤ人迫害関係の記事が載る。

これらを受けて5月8日の『大阪朝日』の社説「ドイツの弾圧政治—坑儒焚書の暴挙に及ぶ—」は強い批判的立場を示している。冒頭ヒトラー内閣出現以来のドイツ当局の弾圧政策について「いよいよ奇怪を極め、そのなすところ到底吾人の常識を以て判断出来ないものがある」とし、「吾人がドイツ当局者の非常識に呆然たらざるを得ないことは、敢て以上の政治的、経済的専制をのみ指すのではない。そのドイツ文化の淵源にまで撲滅の手を下すに至つたその大胆にして無理解なる振舞は実に言語道断といふべきである」。坑儒焚書の乱行を「二十世紀の今日において、しかも世界にその文化を誇るドイツにおいて行ふに至つては、吾人たゞ咄然としていふべき言葉を知らぬ」。「アインシュタイン氏やハーバー氏らの存在は百人のヒトラーにも勝りて、世界的にドイツの偉大さを高めたのである。知らず、国際協調によつてその国民の地位を改善せんとすると、排他的ナショナリズムによつてこれを達せんとすると、その得失果していづれに在るであらうか、敢て茲に徴するまでもないであらう」。ともかく「今ドイツの国力回復のため現政府が採れる政策は、その目的と相反せる結果を生ずべきことは余りに明白である」。「蓋しドイツが自らその誤れる政策の犠牲となりて後悔するであらうことは、爾く遠い将来でもないと推察される」と言って結んでいる。同日の「天声人語」は焚書とユダヤ人の血の排斥の不合理、非人間性について揶揄的にとりあげている。以後にも5月8日の社説にそつた傾向の記事は多い。ナチスの態度は遂に文化の

破壊者の異名をさへ謳われるに至ったと批判していた。

『大阪朝日』のヒトラー内閣成立以来の報道を辿ってみて、その記事はほぼ一貫したナチスに対する否定的ないし批判的な立場を読みとることが出来る。在ベルリン四宮恭二（大阪商業大学講師）のルポルタージュ「十字架上の独逸大学」（6・21～25）はこの手の『朝日』の傾向にそって書かれている。成瀬無極（京都帝国大学教授）「ユダヤ人は何故嫌はれるのか？—ナチスの文芸翰林院弾圧、軽蔑された理智主義」（5・11～12）はユダヤ人が総じてコスモポリティックであり、また頭脳明晰感情豊富で、しかも資力を持っているところから、学芸界をリードし、大きな新聞雑誌などを経営して実権を握り、党派をつくる傾向があるので嫌われるようであると語ってはいるものの、ユダヤ人といえども多様な人間性を保持していることを指摘した解説的な一般論であろう。しかし、学者、文化人の記事は、直ちに新聞の意見ではないにしても、それと相反する意見に紙面を積極的継続的に提供することはない。以後にも新聞の求める意見をもつ筆者が登場すると言ってもよい。翌1934年には記事の量はいちじるしく減少したが、基本的には前年の延長線上において報道された。

『朝日』の報道姿勢の転換点は1935年1月27日の記事によく現われていたと見ていい。当日夕刊第一面の大半を埋めたベルリン特派員黒田礼二の記事〔26日発〕であり、以後はこの軌道にそった運行が徐々にスタートする。

見出しは横組みの「ヒトラー総統と語る／邦人記者最初の会見」を配し、次に「元首の貫録堂々！忌憚なく軍縮を論ず／“安全感の軍備は正当”／日本へ寄せる興味」「簡素な官邸に日本製の屏風／莞爾として固い握手」などと続く。黒田特派員の顔写真のほか三段組みのヒトラーの写真には「率直に心境を吐露するヒトラー総統」のキャプションを付し、「本社特派員が会見したドイツ官邸」の写真も載せている。この会見は『朝日』にとって誇らしいことであつたらしい。

ヒトラー氏が国家元首となつて以来外国記者と会見したのは英、米の本国から派遣されたアメリカのハースト系新聞のピエール・フツス氏とイギリスのローザミア系新聞のワード・ブライス氏との二名のみで、滞独の外国特派員には原則として会はないことになつているのでこの会見の承諾は今日のヒトラー氏が日本に対して如何に個人的に興味を有せるか及び朝日新聞社が海外においてもいかに重要視されてゐるかの証左となるものである。

これは会見の内容よりも、会見の事実を重視したと言うべきで、上のようにゴシック活字を使い、本文中でも記者は「先づ朝日新聞社を代表して上野社長の名においてドイツ国民及びドイツ最高元首に対する敬意を述べるとヒトラー氏は

莞爾として二三度うなづきながら」の部分はおとくに大きな活字を使っている。黒田は「如何にも悠揚として明らかに一国の円満な元首たる貫禄を具へて来た」と述べ、最後にかれの「地位がその言動から察していかにも安定してゐることゝ同時に氏が新聞記者に対して外交辞令的な言葉を用ひないで直裁簡明に何ごともテキパキといつて退けるのはかへつて気持が良いといふ感じであつた」と結んでいる。

こうしたヒトラーとの関係を結んでしまった『朝日』に以後の客観的な記事が期待できるだろうか。これはまた『朝日』のドイツとヒトラー理解の先達としての地位の宣言でもあつた。

やがて『朝日』の路線にのつた学者が登場する。京都帝国大学教授経済学博士の肩書の黒正巖の「労働に喚起する“復興ドイツ”の青年」（'35・6・7～9、11）と題するルポはこの三年間のもたらした新聞の変貌をもっと直截に表現している。かれはナチスが新しい原則のもとに国家の建て直しを希望して、資本主義的敗政経済の立場を超えようとしていることに期待し、それを突き動かしている「労働精神の旺盛」を高く評価している。その対極に富、資本、人口に恵まれながら国家が進歩しない例としてアメリカを挙げているのは、以後の日本の外国観の趨勢から見ても興味がある。長文のルポに黒正の感動があふれる。その一部には、

私は眼のあたり青年の労働現場を見た。それは日本の専門の野外労働者でもなし得ないと思はれるほどの労役である。しかも顔面に笑をたゞへつゝ愉快地に従事してゐる青年軍を見た時、私は他の国のことながら眸のおのづからうるほふのを知らなかつた。私は羨望と感激にうたれたのである。（中略）ドイツ全国の労働奉仕軍の除隊兵二十万人がベルリンに入場して来た。私はこれをチウエンチン街ゲデヒンスキルへの前に迎へた。その厳肅にして隊伍整然たる行進を見、その肩にするシャベルの耀くのを見て凱旋する「真の平和の戦士」の前には頭の下がるを覚えた。（中略）この貴い精神、国家のために労働に歓喜するドイツ青年の雄しきこの姿が日本の青年諸君となることを念願してやまない。誠に国家の興隆は青年が労働に歓喜するところにおいてのみ見出し得るのである。

このように、黒正自身が歓喜して「ドイツ」が「ナチスの暴政の下に今にも滅亡するやうに論断する」一派に対して「大なる誤り」であると断言している。こうした観点から、労働精神を有しないユダヤ人はドイツ国民と断じて相容れず、「国民を利子の奴隷より解放しようとするならば、当然にユダヤ人を排斥せざるを得ないのである」と断じていた。

かくて国家興隆のドイツに学ぶべきことに関心は移っていく。歓喜して勤労する青年とともに女性にも目が向けられた。同じ京大医学部の藤森速水は「ドイツの若い女性が母性として非常訓練を受けてゐる涙ぐましいばかりの真剣な有様こそ日本女性への警鐘でありませう」と言って、日本女性としてのつとめを説いた（『大阪毎日』'37・8・21）。

1938年の新聞には、ドイツのオーストリア併合について交通規則の改正、国旗の廃止および「ユダヤ人を清掃すればよい程度」（『大阪朝日』プラーグ発14日、浜田特派員発、3・16）までに解決済であることを伝え、また「ユダヤ人と共産主義とを排斥すべき」との「ヒ総統獅子吼す」（同、ベルリン特電12日発、9・14）るのを報じている。そして対独策に焦るのは民主国家群の方であると評した。

『大阪毎日』の社説「独奥合併の大進展」（3・13）は「ヒットラー独総統の進展の鮮かさに至つては、天馬空を行くが如しといふの外はない」と評し、「彼はすべてを犠牲にして民族的栄光のために起つてゐるのだ。今回のことはオーストリア一国から見れば一種の悲劇ではあるが、吾等はむしろこの国が一切の過去を清算して新生活に入り、もつてゲルマン民族の興隆に貢献せんとするを見てその前途を祝福するものである」と讚美している。

この年には日本青年団が訪独し、ヒトラーユーゲントが来日した。在独の宮本守雄「訪独青少年団見聞記」（『大阪朝日』10・5、7、10～12、14）は、その感動を伝え、来日のヒトラーユーゲントは至る所で歓迎され、逐一報道された。この前後「ナチの若人に吾らは学ぶ」（『大阪毎日』10・6）、「ヒットラーユーゲントにわれらは何を学んだか」（同、10・19）などと熱心に伝えられた。

『大阪毎日』は11月12日の第一面中央に六段を使って20日から「大独逸展覧会」の大きな広告記事を載せた。その口上は次の通り。

羽撃く世紀の齒車として日の丸とハーケンクロイツの結びはいよいよ固い、だが盟邦ドイツとはどんな国か、その何ものにも恐れぬ顔、砕けぬ骨、火を吐く魂はいかにして培はれ、いかなる鼓動を波打たせてゐるのか、本社はこの友誼と要望に応へるべくドイツ政府の積極的参加を得てドイツ大使館、日独文化協会、ドイツ文化研究所と相結び「大ドイツ展覧会」を開くこととなった。

そして、この年の日独関係におけるハイライトは11月の日独文化協定の成立調印であった。これを批評すべき『大阪朝日』『大阪毎日』両紙の11月26日社説は無条件の絶賛ぶりと言ってよい。まず『朝日』はこれが「人類進化のための新らしき文化の創造と建設とに貢献するのみならず、世界平和の促進と確保とにも与

つて大いに力あるものとして慶賀に堪へ」ず、「吾人は全世界の文化国が、ことごとく一つの文化協定によつて固く結ばるべきユートピアの実現する日」を夢みる。次に『毎日』は「単に政治的取極めにすぎなかつた既存の防共協定を、精神的に補強したる意味において、両国の結合が、より基礎的、根本的になつた」が、「両国の結合の、国際的重要性を思ふ時、吾等は更に一步を進めて経済的、軍事的の協定にまで到達するの必然性を認めるものであり、文化協定は「極めて適切な予備工作でなければならない」とまで主張し、「わが国の大を為す所以は、世界に向つてわが独特の文化を光被せしむる所以でもあるのだ。吾等はその組織的發展の第一歩を、日独協定によつて踏み出し得たことを限りなき喜びとするものである」と結語している。徳富蘇峰はこの日の『大阪毎日』のコラムで英仏をさして「我等日、独、伊三国は、この世界の公敵に向つて、一層歩調を揃へ、之を退治する必要を正視し、須らくその対応の策を講ぜねばならぬ」と息巻いた。

翌1939年『大阪朝日』社説(4・29)は、米英仏はあたかも和戦の鍵がヒトラー、ムッソリーニ両巨頭のみにあるかに言い、戦争が勃発するならその責任が偏に独伊側にあるように説くが、「そのいはれなきことを喝破してまづ完膚なきものといへる」ことを強調して、「ヒ大統領が各国に安全保障を与ふるに吝かならずといふ態度を明らかにしたことにより、英仏米は一層深くその反省が要請せられるのである」と結語している。翌日の『大阪毎日』社説は、冒頭に「世界が待ちに待つたヒトラー大統領の演説は今や世界の公有物となつた」と謳い、同演説を擁護したうへ、「三国間の盟は鉄のごとく堅いのだ。否、この対象がないならば三国を主力とする防共陣はそのレーゾン・デートルを失ふのだ」と結んでいる。

一方、『朝日』の「天声人語」(’39・4・29)はこの演説を聴くために、ドイツ官民が一時間半業務を停止し、学校も一斉に休んでラジオを聴取したことを「ドイツ国民がいかに自国の運命を自己の運命と思念し、個々人ことごとくが一国の休戚を荷うてゐるとの責任感強きかを思はしめる」と讃えた。もはやドイツは諸外国中の一国ではなかつた。

この7月15日には『朝日』『毎日』を含む新聞・通信10社が「対英共同宣言」をしている。イギリスが「帝国の公正なる意図を曲解して援蔣の策動を敢て」するのに対して、「我等は聖戦目的達成の途に加へらるゝ一切の妨害に対し断乎これを排撃する固き信念」を表明し、イギリスの東亜における認識を是正し「新秩序建設に協力以て世界平和に寄与せんことを望む」という宣言である。新聞の立場はこのように極めて明瞭であり、翌年の日独伊三国同盟に突き進む途上の新聞としての準備はすべて整えられたと言ってよい。ヒトラーはすでに「天才」でもあつた。『朝日』特派員北野吉内によれば、ドイツ国民のヒトラー敬仰は揺ぐことなく「この偉大な天才の人氣」は前大戦のカイザーのそれを凌駕し『廿世紀のナポレ

オン』に大成したかれには当然十分の期待がかけられ、かれの天才が歪曲してゐないと見ていゝのだ」(『大阪朝日』'40・1・4) った。

かくて三国同盟締結は次のように言祝がれた。

「世界史に新時代」「登音高し“世紀の推進力”」「盟ひは一つ、日独伊／歴史的
一瞬調印式の光景」「万歳の嵐、感激の夜」「おゝ吾ら断乎往かん」「『真の日本』
に還る」「喜び一しほの二少女」(『朝日』9・28)。「“世界革命”の国際協定」(同、
9・29)。「相寄る魂／必然的運命」「独伊歓喜」(『大阪毎日』9・28)。次に冷静たる
べき社説はどうだったのか。『大阪毎日』によって見る。

日独伊三国条約は遂に成り、同時に優握なる詔書を渙発あらせられ、この重大時局に処すべき道を訓へさせ給うた。聖慮広大まことに感激の極みである。今日世界の現勢から帰納して、三国が結局この姿勢をとらねばならぬであらうことは識者の夙に唱道したところであるが、(中略)三国が本来の共通的立場を率直に認識し、力を協せて共同の運命を開拓するために、かつ人類を明るく新生活に導くために積極的に動かねばならぬ時はきたのだ。東亜をアングロサクソンの桎梏から解放し、ここに東亜人のための東亜を建設しようとなが国の志望と努力と、自らをアングロサクソンの圧制から解放することによって欧州新体制を築き、力相応の将来を求めんとする独伊の志望と努力とは符節のごとくびつたり合ふ時が来た。機が熟したのである。

かくて「人類福祉に貢献する途を択ばんことは三国の希望してやまざるところである」と結論して、むしろ政府になりかわって弁じているのである。『大阪毎日』はドイツ各紙の「いひ分」を忠実に紹介し(ベルリン本社特電 16日発、11・17)、別に「硯滴」欄で次のように述べている。

ドイツのユダヤ人弾圧にユダヤ人の国、米大統領が文句をつけた▲米国籍をもつユダヤに関するものならとにかく、ドイツ人がユダヤ人を煮て食はうが焼いて食はうが米国の口を出すべき問題ではない▲殊にドイツの民衆がユダヤ人の教会や商店に対して駐仏大使館書記官のユダヤ人に殺された復讐的行動を執つたのは、別にドイツ政府の知つたことではないし、ユダヤ人の財産的損害は十億マークといはれるから相当のものだが、ドイツの新聞が英国の新聞を反駁してゐる通り、ユダヤ人半個髪の毛一筋触れられたわけではない。

こうした品性を欠くドイツ擁護論に加えて『大阪毎日』は「ドイツのユダヤ人弾圧」(11・23)と題する解説記事を書いている。これは暗殺事件以後の独英米に

における経過、ユダヤ民族の歴史、現況から説き、「所謂世界的特殊部落人として生活してゐる、この非同化性こそユダヤ人問題の核心」なりとし、最後に「支那事変はユダヤ人の共産主義から極東を救はんとする聖戦である点に鑑みてもユダヤ人問題はわれ等が対岸の火災視すべき問題ではない」と言って結んでいる。この記事の見出し「世界を蝕む“無国籍者” 事変の陰にも援蔣魔手」はこの新聞のユダヤ人観が示されていると言うべきであろう。

新聞はヒトラーほか首脳の演説は機会あるごとに伝えた。二、三を拾ってみる。

若しユダヤ教徒が我々を掃蕩することが出来ると考へるならば誤りも甚だしい、掃蕩されるのはユダヤ人自身である。かつて多数のユダヤ人はひそかにほくそ笑んでゐたが彼らは最早笑ふことも出来ない、今日笑つてゐるユダヤ人も間もなく笑ふことが出来なくなるであらう（ヒトラー・ナチス運動犠牲者記念祭前夜演説『朝日』ベルリン特電 8 日発、'42・11・10 夕刊）。

ゲッペルスは各界代表者を前にして演説して「ユダヤ人の脅威を根絶する方針であり、必要な場合極めて徹底的な手段にでるであらう」（『朝日』ベルリン発特電 18 日発、'43・2・20 夕刊）と強調。在独外国新聞記者団を引見し、ユダヤ人問題について「ユダヤ人はドイツ国家内の伝染病菌である、ユダヤ人問題はこれを根本的に解決し、その伝染病菌を根絶せざる限り、直ちにまた蔓延の危険あるものである」（『朝日』ベルリン特電 13 日発、'43・3・15）と断じた。さらに必勝国民大会では、「欧州からユダヤ人を清掃するのはただに倫理の問題でなくまさに国家自衛の途であると喝破、そのためにはいかなる手段も選ばぬだらうと言明」した（『毎日』ベルリン特電 5 日発、'43・6・7）。

このように一国の為政者たちが公然繰り返したのであり、日本の新聞は、一言の批判を加えるでもなく、むしろ擁護的に布達する役割を担い続けたと言ってよい。じつは彼らの言明にたがわずホロコーストがおこなわれたのが歴史の事実であった。新聞が反ユダヤ陣営に投じてからの報道から、日本人はデマゴギーを嗅ぎとっていたらうか。

毎日新聞社の企画事業「国際思想戦とユダヤ問題講演会」は名うての反ユダヤ論の権威四王天延孝中将（翼賛選挙で首位当選）、愛宕北山、増田正雄を講師として大阪公会堂に三千の聴衆を集めた（『大阪毎日』'42・7・25）。大阪松坂屋での「ユダヤと国際秘密結社展」は初日から盛況（『毎日』'43・3・5）で、会期中に反ユダヤ講演会を催し、日延べを決める（『毎日』3・21）ほどであった。また反ユダヤの国際政経学会主催の「ユダヤ問題講習会」（7・24～26、東京）を後援し、毎日主筆の上原虎重も講師に加わっている。

新聞は枢軸側の戦局の類勢とりわけイタリアの脱落前後からは、事実についての報道よりも、主観的解釈の布達の機関と化していった。リアリティーを捨てて観念的に描かれた次元でユダヤと非ユダヤとに二元的に分けて現実のすべてを説明しようとしているかのようである。その代表例のひとつを挙げる。

『毎日』社説「ローマ爆撃とユダヤ民族」(’43・7・29)はローマ空襲とユダヤ人の陰謀とを結びつける。「ローマ爆撃をもつてキリスト教徒の所業とするには、そこに少なからぬ無理があるので、過日われ等は本欄において」それを指摘したが、やはり「ユダヤ人とユダヤ思想を基礎とするフリー・メーソンリの計画であることが判明したというのである。そしてルーズヴェルト、イーデンら反枢軸指導者の正体は「ユダヤ民族の総帥であるが如く、またその囚人であるが如き」であり、そこに「現大戦において米英を指導しつつ」ある思想が何であるかもいよいよ明らかにされたわけである」と結論している。

かくて1943年9月のイタリア降服について「魂なき者の悲劇／執拗な敵の謀略に倒る」(陸軍中将中岡彌高)、「独、重荷を下ろす」(海軍少将匠瑳胤次)、「役割は終った独は却つて戦力増強」(元駐伊大使白鳥敏夫)(『朝日』9・10)、「備へよ敵の思想戦／伊脱落はむしろ好条件」(陸軍中将中井良太郎)、「枢軸の癌切開われら生産陣必ず勝つ」(内閣顧問郷古潔)(『毎日』9・10)、そして「朗報ベルリン／総統の演説に意気上る」(『毎日』9・12)などと報じた。これらは字義だけから見れば、イタリアの降伏大歓迎の特集ではないかと疑わせる。三国同盟締結の時、「三国間の盟は鉄のごと堅いのだ」と社説で述べ、歓喜したのは何だったのか。

やがてこの降伏の主因は敵の謀略であったと展開する。『毎日』は「バドリオの裏切りは実にユダヤの陰謀であつた、ムツソリーニ前首相のあの失脚もユダヤの爪牙のなせる策であつた」と断定し、この「恐るべき国際秘密結社フリーメーソンリ、敵米英の本営を支配するユダヤの血とドル、平和の女神に偽装した世界革命の元凶、ルーズヴェルトもチャーチルもその一分子に過ぎないといふ、新秩序建設の軍は即ちユダヤを地上から抹殺する戦いでなければならぬ」と謳って、国際政経学会の長谷川泰造に「姿なき敵ユダヤの陰謀を破碎しなければならぬ」と語らせている(’43・9・12)。次は白鳥敏夫、大串兎代夫、大場彌平による「謀略」を連載(9・14～15、17)した。日独はイタリアのように謀略にかかるような弱点は克服されているが、敵アングロサクソン＝ユダヤは悪魔的に挑もうとしているのを銘記して備えよというのが趣旨である。とくに白鳥は「この戦争の黒幕は世界のユダヤ勢力であり、これをはつきり認識することが非常に大事であると思ふ、苟くも謀略に関してはユダヤ勢力—彼らが今日如何に世界を動かしてゐるかを知らなければ全く見当違ひになる」。イタリアはその点が欠けていた。「相手のユダヤ的世界制覇の野望に対してわれわれは日本の理念をたて人類世界を光被すべく

努力せねばならない」と力説した。上原虎重もこれを承けるようにして、同じ論理で用語もダブらせて「国民に懇ふ」（『毎日』'43・9・16）という記事を書いている。

イタリア降伏前後、しばしばユダヤと謀略にかかわる社説が登場する。まず「ユダヤ・アングロサクソンの狡猾にして陰険かつ執拗な虚構宣伝」を軽視してはならないこと（『毎日』「宣伝戦を再検討せよ」'43・2・8）をはじめとして、ゲッペルス演説を敷衍した、米国が「金権ユダヤ族と赤色ユダヤ族」の「憐れむべき奴隷となり終るも遠い将来のことではない」ことを念頭において「米英に人類を裏切る者としての烙印を捺したのである」こと（『毎日』「ゲッペル氏の演説」'43・2・20）。ユダヤ族の把握のもとに「外に敗れつつある米国民は、国内においては奴隷の地位に沈淪しつつある」こと（『毎日』「米国に君臨するユダヤ族」'43・3・6）。「国際的金権主義国がイタリア国内に同様に、ドイツ国民の抵抗を謀略宣伝で覆さうとするが如きは全く兇戯に類する」こと（『毎日』「毅然たるドイツ」'43・9・12）。「われわれの敵は悪魔なのだ。悪魔と共に生きて行くことは出来ない」こと（『毎日』「敵の正体を見よ」'43・9・20）。そしてカイロ会談を論じて、「人類の敵米英に対する我が正義」の前に「敵側の宣伝謀略は、立ちどころに雲散霧消するであらう」こと（『朝日』「非望を自白せる敵謀略」'43・12・9）等々が目につく。さらにバドリオの対独宣戦は、いうまでもなく裏切りであり、それは「米英のユダヤ勢力がイタリアのユダヤ勢力に働いた結果」だと主張し続けた（『毎日』'44・4・3）。

ドイツ敗北の一月余り前にも、ドイツ休戦ニュースはデマである。「むしろ英国における厭戦気分の横溢は余りにも有名」であり、「要するに敵は非常に焦つてゐる。それはヨーロッパにおいても太平洋においてもはつきりと現われてゐる」。つまり「敵としては謀略宣伝の手段に訴へるのほかないのではないか」。当局は「敵の意図を白日の下に暴露するやうに勉めねばならぬ」（『毎日』「謀略宣伝に没頭する敵」'45・3・21）と社説で主張した。

これらを通して明らかなのは、新聞がもはや事実を伝えるのではない、事実を曲解した強弁をもって説論を垂れるための媒体となりおえていることである。はたして新聞は事実を知ろうとしたのか否かも疑わしい。むしろあえて事実を見まいとしたかのごとくであり、従來說ききたった盟邦絶対の論理に自縛されて、そこに一方的な希望的想念を織り込みながらきわめて断定的にその見解を強要した。こうして新聞が事実を報道しなくなったとき、そこに展開された言論（社説）もまた極めて独断的な虚言そのものとなってしまっていたのである。かつて隣人としてのユダヤ人を見たことさえなかった日本人にとっては、知らぬ外国のことであり、遊離した大新聞の一人相撲の論であるにすぎず、反ユダヤ主義は国民とは

無関係に、戦時下の新聞だけに空しくその痕跡をとどめた。ある国を無条件に讚美し、その国になり代って反ユダヤ宣伝を担った、いたましい痕跡とも言える。

二

新聞がヒトラー讚美に転じていた 1939 年に法学博士西本頼は「ユダヤ民族性の法史的研究（一）」（京都帝国大学法学会『法学論叢』第 41 卷第 3 号）において、ヒトラー『我が闘争』について次のように評している。「同書が近來の名著をなしたのは因より彼の豊かな天才と周到なる準備とによること勿論であるが、同書が徹底的なる民族意識からなっている」。「独逸民族の再興と、国内ユダヤ民族の没落を意味する処のナチス政権樹立の雄々しき序曲に他ならなかった。爾來ナチスは嘗々として独逸民族の發展向上と共にユダヤ人の排斥を着々実行して行ったから、以來黑白赤の鉤十字の党国旗の翻へる所、必ずユダヤ人は眞の安住を奪はれるべき運命に置かれたのであった」。このような視点に立って、ユダヤ民族史および現今の対処法を提起している。これが帝国大学法学部の學術誌の論文であった。

同じころ、清沢冽は「ヒトラーは何故人気があるのか—ドイツに來てナチス運動を觀る—」（『中央公論』1938 年 2 月号）において、ナチスの運動は論理の解剖にたえない宗教運動であり「今はヒトラーの一人芝居になってゐる」。「宗教の火は自から燃えつくすまでやまない。そしてドイツの宗教的熱火は今、ヒトラーを音頭取りとして炎炎と燃えさかっている」と評した。また「ヒトラーの誤算」（同誌、1939 年 10 月号）では、ドイツのオーストリア併合、ズデーテン割譲などを背景に「ヒトラーには敵のいふことも、もう耳を傾ける余裕はなかった。今までの場合もさうであるが、今度もかれの欲望はゴム球のやうにふくれていった」。「ヒトラーが誤算したかどうかは、後世の歴史家の任務である」。「誤算は冒險的英雄につきまとふ必然の産物ではないか」と情勢分析したうえ、ヒトラーの運動を宗教運動と觀ることによって、それが「恐ろしく独断的であり狭量だ。その現れがユダヤ人迫害であり、教会に対する抗争だ」として「ユダヤ人が何故に攻撃の標的となったのか」を論じている。ヒトラー讚美の大新聞が「人類を明るい新生活、福祉に導く、世界史の新時代」と音頭取りをしていたのとの差を改めて知る。

その清沢は『中央公論』『改造』『国際知識』などへの常連の執筆者の 1 人だったが、1941 年 2 月には情報局二課（出版関係所管、1940 年設置）の禁止執筆者リスト（矢内原忠雄、横田喜三郎、田中耕太郎、水野広徳、馬場恒吾、清沢冽ら）に挙げられた。さらに警視庁は自由主義者と目されていた尾崎行雄、芦田均、馬場恒吾、宮沢俊義、清沢冽らへの旧刊著書の発売禁止を指定した。1944 年には『中

央公論』『改造』そのものが軍部の勧告によって廃刊されるに至った。清沢は特高警察の監視下におかれながら『現代史』を後日に書くための記録をとどめ置かん』との意図によって『暗黒日記』を書いた。当然既述の新聞に対するドイツ、反ユダヤ論への批判が記述されていた。

現実の対ユダヤ人に関して言えば、1938年3月の「オトポール事件」における樋口季一郎および1940年7月～8月のリトアニア、カウナス日本領事館杉原千畝領事代理による、いわゆる杉原ビザについても銘記されてよい。

1938年3月、シベリア鉄道のソ満国境オトポール駅に18人のユダヤ難民が到着し、その後難民は増えていったが、満州国外交部は入国を拒否した。これに対して関東軍司令部付ハルビン特務機関長樋口少将は外交部に働きかけて入国ビザの発給を促し、いわゆる「樋口ルート」が開かれた。しかし、これに対してドイツから日本政府に抗議書が届けられ、関東軍内部でも樋口の独走を問題視し、処分を求める声が強まっていた。関東軍司令部に出頭した樋口は、東條英機関東軍参謀長に「人道に反するドイツの処置に屈するわけにはいかない」旨を訴えたのに対して東條は耳を傾け、かれに懲罰を科すことをしなかった。東條のこの態度により軍司令部内での樋口批判は下火となり、「ドイツの抗議は不問に付された」という⁵。樋口は前年の1937年12月の第1回極東ユダヤ人大会（ハルビン）では来賓代表としてナチスを批判し、ユダヤ人の立場を擁護する祝辞を述べ大きな拍手で包まれたというが、この大会の開催について、日本の新聞では一行も触れられなかった。

杉原千畝がカウナスでポーランドからのユダヤ難民に、外務省の意向をこえて人道上発給した日本通過ビザについては近年多くの研究によって周知されてきている。

三

1940年夏から1年間に杉原ビザにより、シベリア鉄道でウラジオストックに着き、海路敦賀に来航したユダヤ難民は約6,000人と推計されている。敦賀市民はそれをどのように迎え、新聞はどのように報じたのだろうか。

日本海地誌調査研究会は2006年3月に「敦賀上陸ユダヤ難民足跡調査プロジェクトチーム」を立ち上げて、28名に聞きとり調査をおこない、32件の証言を得ている。

多くは敦賀港から敦賀駅へ徒歩で移動する哀れな格好のユダヤ人の集団を見た印象だが、「朝日湯が一日休んで、タダで風呂に入れた」こと。ユダヤ難民に「リンゴなどの果物を無償で提供したという」少年は「私より6歳上の兄だと断定し

ても、ほぼ間違いない」こと。「実家は駅前で時計、貴金属を扱う商売をしていた」が「港に船が着くたびに、着のみ着のままのユダヤ人が店にきて」、「沢山の時計や指輪を買っていました。ユダヤ人はそのお金を持って駅前のうどん屋で食事をしていました」、「また、父はユダヤ人に店にある食べ物を気の毒やと言ってよくあげていました。私も持っていたふかし芋をあげたこともあります」などの証言。敦賀尋常小学校長が朝礼で『昨日の欧亜連絡船で上陸し神戸や横浜へ行った外国人は、自分たちの国がないユダヤ人でいま哀れな格好をしても金持ちが沢山いる。外国人の中には、いろいろな事情があってやむを得ず旅をしているひともある』というような話をされたことをかすかに覚えている」などの調査結果を挙げている⁶。

一方、新聞もユダヤ人避難民の到来を報じていた。たしかにその姿が伝えられながら、すでに伝統的なユダヤ観のバイアスが加えられていったと言ってよい。

1941年早々以降「流浪のユダヤ人洪水／敦賀へも着船ごとに百名余」（『大阪朝日』2・4）と報じられる成り行きが見られるに至る。この記事のまとめによると、1940年に北欧からシベリアへ移動したものの5万、浦塩から敦賀への船客1,500余名中1,200余名までがユダヤ人で、さらに1941年から翌年にかけて約20万がソ連のインテリから入っていて、その相当数が日本を経由すると見積っている。これに対して「敦賀検察当局でもこれらの移動部隊に混つて暗躍せんとする国際スパイの侵入絶滅に嚴重な監視の眼を光らせている」と言って結んでいる。続報では、彼らは「現金をしこたま持つもの煙草銭さへこと欠くものもひとしくその表情には深い懊悩の皺がきざみ込まれてゐるが、口を揃へていふことは日本の戦争を知らぬげな平和そのものゝ姿、日本人の暖かい親切もたゞへることだった」と書き、「たとひ乞食になつてもよいからこの日本において貰ふことが出来たらどんなに嬉しいことでせう」という取材をしている（『大阪朝日』2・6）。『大阪毎日』は「ユダヤ人、ドッと敦賀に上陸／逐はれた民の凶太い態度」の見出しで紙面をつくっている（2・14）。

この種の些末な記事の比較をする。『大阪朝日』は敦賀上陸の彼らが「安堵の微笑を浮べ早くも覚えた“アリガタウ、アリガタウ”と愛嬌をふりまき（中略）賑やかな国際的な異風景を現出した」あと、神戸では分宿に先立ち祈祷会に出席したことを写真入りで「さすがは“神選民”だけあつて神前に敬虔な祈りを捧げてみた」（2・15）と伝えている。これを『大阪毎日』は「流浪のユダヤ部隊大阪を通過神戸へ／ゴチャゴチャ無統制に」の見出しで「同じ環境の連中にかかはらずばらばらに三等車に分乗」「薄汚れた」「うらぶれた」姿や「アッコーディオン一つを財産の暢気さうなもの色とりどりの風体」が「フォームに話題をまいて」神戸で「収容所に落ちついた」（2・15）と報じている。

この時期に『大阪朝日』は、『大阪毎日』にはない「流浪のユダヤ人」(2・9～14)を6日間にわたって連載した。ここでは現状とその背景の詳細を概ね客観的に述べ、部分的に同情の色を読みとることが出来る。そして「欧州で喧しく云為されてゐるがごときユダヤ人をめぐる世界的謀略がはたしてこれらのユダヤ人の胸奥にも蔵されてゐるのあろうか」とも自問している。ただ肝心なところで、第一次大戦の仕掛け人とその勝利者が「ユダヤ人といはれ」、戦後の攪乱に悪辣のかぎりをつくしたのもまた「ユダヤ人の陰謀といはれる」ことを否定はせず、『シオンのプロトコール』を紹介して、その「恐るべき言葉の羅列こそは怖れられ嫌はれるユダヤ民族の真相である」としてしまっている。

当時の避難外国人2グループについての『大阪毎日』のルポも興味深い('41・7・24)。その1は独蘭開戦以来オランダ領インドネシアに抑留されていた約400のドイツ人、その2は約800の避難ユダヤ人である。見出しからすでに「ホテルでも子供の食器は母自ら消毒／無駄なく規律正しい独逸夫人／ユダヤ人は⊙(注・公定価格)まで値切る」とされている。そえられた2葉の写真は対照的でそのキャプションはそれぞれ「神戸でドイツ婦女子の午後の楽しい茶の時間」と「神戸ユダヤ協会でパンの配給をうける流浪のユダヤ人」となっている。前者は神戸、有馬、奈良、京都の一流ホテルおよび同胞の住宅別荘に分宿し、1日平均10～16、7円の費用は一切ドイツ大使館から支給され、京阪神各地で交歓したのを伝えている。それらを通して彼らは日本人が見習うべき多くの美点をそなえていることを教える。他方、後者は次のように報じられた。来日「当座はホテル住ひで豪気なところを見せた彼らも、いまは殆んど青谷や野崎通あたりの借家に合宿し、神戸ユダヤ協会から貰ふ一日一人一円五十銭を命の綱に自炊してゐる有様」で「小魚と野菜で間に合はせてゐるくせに見栄坊のところがありオリエンタル・ホテルのロビーへ出かけて一ぱいの紅茶を二、三人で廻し飲みしたり、外から同族を連れ込んで一人前五十銭づつとつてホテルのバスに入れたりユダヤ人的性格を遺憾なく発揮してゐる、その日暮しのユダヤ人の群はかうしてあてのない第三国行の旅券獲得に血眼となつてゐるのである」と。これらはあるいはその通りであったかも知れない。しかし、じつは伝統的ユダヤ人観に依存して状況を説明し、そのイメージに合わせて「実証」してみせたルポと言えないだろうか。このイメージに合致しないものは見まいとしているかのようでもある。その傾向は目前の難民報道に関して『大阪朝日』より『大阪毎日』に顕著にみられる。

1941年5月ごろからは避難ユダヤ人の日本出国にかかわる記事が目立つ。両紙ともその困苦を予想して悲壮な船出に心をかけ、『大阪毎日』は埠頭で「見送群も見送られる者も前途を遮る幾多の困難と危険を思ひ浮べてさすがに暗澹たる出帆風景を描いた」と報じた。大半は行き先を持たないまま、とりあえず上海に赴く

ことを余儀なくされた。その一要因に、7月下旬米、英、蘭印が相次いで日本資産を凍結し、日米関係逼迫が急となったことがあった。これに対しても「“凍結”の蔭にユダヤ人」の記事（『大阪朝日』8・2）がある。もしそうなら在神ユダヤ人を苦境に立たせるという皮肉な結果をもたらしたことになる。その結果8月20日と30日の2回にわたって300余名が大挙上海に渡ることになり、残留の約850人は9月にかけて「相当捌ける見込みで昨年以來国際都に氾濫してゐた渡鳥も九月末には一人残らず神戸を退散しさうな見込みがついた」（同上）と報じている。8月20日神戸出帆の第1陣289名を「懐中無一文の流離の身にもお洒落だけは忘れられぬ彼らはこの暑さの中に勇敢にも冬のモーニングやフロックコートに威厳を正して汗びつしよりになつて冬服の上に合コートを着たりさては工面して元町あたりで買つて来た中折帽子やパナマ帽子に頭だけは夏を被つてすまし、日本の番傘を大事さうに抱えたユダヤ娘もあり」、一隊は「梨やリンゴをかじりながら元町一丁目市電停留所まで進軍」（『大阪毎日』8・21）と揶揄的に報じた。別の新聞は「一行は厚つばい冬オーバーやフロックコートを着込んだものなど、その服装はさまざま、鍋、釜の世帯道具から漬物樽まで持つて帰らうとするものまであり」「いままた流浪の旅に出ようとする彼らに憂鬱の表情を顔一ぱいにみなぎらせて心からの名残りを惜しんでゐた」（『大阪朝日』8・21）と描写して戯画化はしていない。月末の「神戸のユダヤ人続々上海へ」（同8・29）は終息の状況を説明している。

これまでのかかわりで言えば、行き先の「上海に巢食う流浪のユダヤ人／商売上手華商顔負け」（『大阪朝日』9・25、信太特派員発）と、「ユダヤの秘密結社フリーメーソンの日本支部ともいふべき神戸マソニック・クラブが」「いまや壊滅に瀕し、扉固き秘密の世界に人知れぬもがきをつづけてゐる」という写真を付した記事（『大阪毎日』『怪奇の殿堂』壊滅へ」10・4）がある。12月の日米開戦までには、日本軍占領下の上海や天津などにおけるユダヤ人対策は別として、国内に関する限りは現実のユダヤ人関係問題は終息したと言ってよい。満州、中国でのユダヤ人問題が、以後の戦時下に日本の新聞で報じられることもなかった。その後のユダヤ難民記事は翌々年、「テヘラン来電ポーランド系ユダヤ人五千人がソ連より三十日テヘランに到着した、右ユダヤ人は更にパレスチナに向ふ予定である」（『朝日』'43・9・22、イスタンブール発同盟）という極小の記事が見出されるのみである。

むすび

日本からユダヤ人が去った後は、もはや現実のユダヤ人に拘束されることなく、

日本の新聞は観念のユダヤ人像をもてあそぶことになる。反ユダヤのイデオログと共通の論理をもって各種の企画事業も遂行し、社説でもそれを繰り返し論じた。そのうえ、「わが国と盟邦との関係が緊密なればなるだけ、世界平和の到来も早まるべきは更めていふまでもない」（『大阪朝日』社説、'42・11・10）という立場を続けたから、ドイツの発信する「ユダヤ禍一掃」（『朝日』'43・1・24、ハンス・ヒンケル「一路、新しい理想へ」）、「ユダヤ禍を根絶」（『朝日』'43・1・24、「ヒトラー総統布告」）の類を伝達するためのメディアに墮していた。イタリアの末路については前述した通りである。

日本に入出国したユダヤ避難民の始終を通して見て、政府レベルから兵庫県や神戸市にいたる行政が、日独盟邦化を進める条件下にもかかわらず、大筋としては冷静に対処していたと言いうる。また敦賀から神戸にいたる地方庶民は彼らに対して、たとえ奇異感をもって見たとしても、これに威圧的に振舞うことはまったくなかったことがうかがえる。むしろ人情をもって接した記事も見出すし、それが事実であつただろう。ところがひとり大新聞はユダヤ避難民に対して一面同情を寄せながら、皮肉な筆をとり続けた。しかも難民発生の背景を解説するにあたっては、固定観念にとらわれて歴史上あらゆる種類の悪事がユダヤ人と結びついたという言い掛りをこととした。新聞は盟邦ドイツに追隨する過程でユダヤ人問題について観念によって動き、やがて独走したのであつた。その結果は、避難ユダヤ人に対する行政と新聞との乖離、庶民と新聞の認識の落差があつたことを指摘せざるをえない。

注

- ¹ ユダヤ系のごく少数の学者、貿易業者、商人などが居住したが、必ずしもそれを名のつたり、周囲もユダヤ人として特別視するような環境はなかった。シベリア出兵を契機に、大正デモクラシーに反対の一部軍人が『シオン長老の議定書』を導入してドイツ、ロシアの帝政崩壊をユダヤ人陰謀として、ユダヤ人が次に狙うのは、すでに骨抜きにされているイギリス王政であるよりは大本日本帝国であるとする反ユダヤ論議を持ち込んだ。これには吉野作造らの批判がなされたが、新聞がその論議に参入することはなかった。
- ² 『外務省記録・民族問題関係雑件・猶太人問題』第3巻（昭和9年1月～昭和13年5月末日）
- ³ 一般に「五相会議決定」とされるが「（極秘）猶太人対策要綱」によれば、その末尾に手書きで次のように付記されている。「以上ハ五相会議ノ決定ト云フコトニアラスシテ総理大臣ヨリ外務大臣ノ提案ニ係ル本案ヲ主務大臣タル陸軍大臣並ニ内務大臣ニ話サ

レ右両大臣カ納得セラレタル上ニテ在外公館ニ訓令スルコトナル」(『外務省記録・民族問題関係雑件・猶太人問題』第5巻、昭和13年12月1日～昭和13年12月末日)。しかし、以後の在外公館へは「昭和十三年十二月六日附五相會議決定」として訓令された。

- ⁴ 多くの研究者は「猶太人対策要綱」が日米開戦にともなって廃止されたとだけ記している。確かに1942年1月の「時局ニ伴フ猶太人対策(連絡會議決定案)」の備考には「五相會議決定猶太人対策要綱ハ之ヲ廃止ス」とある。その要項1には「猶太人ノ渡来ニ特殊ノ事由アルモノヲ除キ一切之ヲ禁止ス」、2には「其ノ居住營業ニ対シ監視ヲ嚴重ニスルト共ニ其ノ敵性策動ハ之ヲ排除弾圧ス」、3では「猶太人民族運動ヲ支援スルカ如キコトハ一切之ヲ為サス」と一段と厳しくなっている。しかし、説明の文中には「然レトモ全面的ニ猶太人ヲ排斥スルカ如キハ八紘一字ノ我国是ニ副ハサルノミナラス必スヤ英米ノ逆宣伝ニ利用セラルヘキニ付原則トシテ猶太人ハ当該国籍ヲ有スルモノニ準スル取扱ヲ為シ」「所要ノ監視ヲ為スニ止ムルコト適當ナリト認メテル」としている。理念と打算とはいえ、独伊とは明確に異なるユダヤ人対策が戦中にも持続されていたとみられる。
- ⁵ 早坂隆 『指揮官の決断—満州とアッツの将軍樋口季一郎—』 2010年、文藝春秋、149ページ
- ⁶ 日本海地誌調査研究会 『人道の港敦賀—命のビザで敦賀に上陸したユダヤ人難民足跡調査報告—』 2007年